

ウイルス、そして命

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

新型コロナウイルスが全世界に恐怖を与えています。まだ解決の見込みがない中、悲しいことに犠牲者が増えつつあります。丁度この事態が起こる前に川口基督教会の木曜集会では、昨年秋から読み続けている旧約聖書のエレミヤ書から、「剣、飢饉、疫病」(エレミヤ書42:17)が古代からの災いの象徴であることを学びました。コロナウイルスという疫病のニュースその直後でした。

私は今回の事態を見ながら、2011年にアメリカで上映された映画「コンテイジョン」を思い浮かべました。舞台は収穫感謝祭直前のアメリカです。旅行先のマカオから戻ったグローバル企業の女性職員が発作を起こします。カジノやレストランで彼女と接触した人々も続々と倒れます。新型ウイルスに感染したのです。このウイルスが世界中に拡散され、人類は凄まじい恐怖に陥ります。わずか1か月でアメリカ人250万人をはじめとして2600万人が死亡します。大統領さえも地下バンカー(シェルター)に避難せざるを得ないほど深刻化するなか、ウイルスよりも素早く広がる伝染病が社会の秩序を壊します。いわゆるフェイクニュース=偽りの情報とデマです。直接見たものよりも風聞を信じようとする大衆は、この偽りの情報に翻弄されます。ある陰謀の理論家はフェイク情報を流して一攫千金を得ようとし、ます。「***花が治療に効きます」と。約4か月後にワクチンが開発されますが、政府は死亡者数を隠蔽します。映画のクライマックスで分かる最初の感染ルーツはこうでした。グローバル企業はビジネス拡張のため密林を破壊します。生殖地を奪われたコウモリは豚の畜舎に移り、食べていた果物の端切れを落とします。これを食べた子豚がマカオのシェフにより食卓に運ばれます。このシェフは洗っていない手でアメリカの女性と握手を交わします。そこから！

この映画の場面は、まるで今回の事態を予言したかのようです。人類の歴史は伝染病の歴史であるとも言われます。これは、言い換えれば伝染病と闘いながら、それに打ち勝ってきた歴史でもあります。アインシュタインはこう言いました。「三つの強大な力が世界を支配している。人間の愚かさ、恐怖、そして貪欲である。」この映画が注目しているのは、自分の土台である生態系を破壊する人間の貪欲と愚かさですが、それは同時に全ての命を尊重することや一部の利益より共同体の安全と共存などの価値を失ってはいけないというメッセージであると思います。そして、ウイルスへの恐怖より命の源をさらに祈り求めるときです。

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

(ヨハネによる福音書 10:10)